

難波西鶴

海との道

【87】

森田 雅也

前回までは西鶴『武道伝
来記』貞享4(1687)年刊』に描かれた九州の話
でした。薩摩から四宮への
逃避行のように、九州諸藩
から近畿圏への出奔例は多
く描かれています。何度も繰り返してきたよ
うに、それは九州航路(西
国)→瀬戸内航路→大坂と
いう海の道が確立していた
ためでした。西国からの物流ルートは情報ルートでも
あり、西鶴の作品化のいい
情報源になりました。江戸時代は関所もあり、
通行手形など必要で、庶
民にとって、旅に出ること
が難しい状況であったこと
は確かです。しかし、現在
と同じように、国の繁栄の
ためには物流は欠かせず、
商人の往来は盛んでした。
さらに武士たちは参勤交
代や国替えがあるわけで
すから、結構日本での移動がありました。今でも書簡な
どの発見で、思わぬ人同士
の交友が確かめられるのも
そのためです。『武道伝来記』巻三の二
「按摩とらする化物屋敷」
も遠く、豊後府内(大分市)
の話です。冒頭に殊更、「今
の世は人すなほになりて、
信心ぶかく、神国の風俗現
れ、悪魔を払ひ、松に音な
く、海に浪立たずして」と
平和な日本(神国)の姿を
強調しますが、これは当時
すでに出版禁止令があり、
「幽霊・怪異の類を出版し
て世の中を混乱させてはい
けない」という条に配慮し
た書き方だと言えます。府内に家柄の良い武家屋
敷がありましたが、住む人

西鶴作品化のいい情報源

がなく荒れ果て、百年も狐
狸の住処となっていました。
この化物屋敷を新参者の
軍学者、梶田奥右衛門は
拝領を熱望します。家老た
ちは許可しませんでした
が、その熱意によりやく賜
り、家普請をして引っ越し
ます。国中はその武勇を普
めめますが、やはり怪異はあ
りました。ある夜、八角の牛で剣を
並べた羽をひいた化け物が
奥右衛門の枕元に現れま
す。奥右衛門が手捕りにし
てやろうと思つと、その殺
気を感じ、消えてしまいま
すが、怪異は続きます。(関西学院大文学部文学
言語学科教授)

九州から近畿への出奔